

コロナ禍における日仏オンライン交流の試み

—Google フォームと Zoom を用いて—¹

French-Japanese online exchange during the Covid-19 pandemic: Using Google Forms and Zoom

西部 由里子 NISHIBE Yuriko²

要旨

本稿は 2020 年度秋学期に、慶應義塾大学でフランス語を学ぶ学生と、フランスのラ・トゥール 中学高等学校、パリ政治学院、フランス国立東洋言語文化学院、ESCE 国際貿易ビジネススクールで日本語を学ぶ学生との間で行ったオンライン国際交流の実践報告である。

コロナ禍による閉塞的な状況の中で、「フランスで、フランス語を話して生活している学生たち」とオンラインでつながることで、フランス語学習のモチベーションを高めることを目指し、全員参加型の Google フォームを用いたアンケート交換と、希望者参加型の Zoom 交流会を実施した。

同世代のフランスの若者との交流は、日本の学生たちにとって異文化理解の第一歩となり、教員にとっても、より能動的で継続的な学習の可能性を考えていく上での貴重な体験となった。

キーワード:

オンライン国際交流、異文化理解、フランス語教育

Abstract

This paper reports on an online international exchange between students studying French at Keio University and students studying Japanese at La Tour Junior and Senior High School, Paris Institute of Political Science, French National Institute of Oriental Languages and Cultures, and ESCE International Trade and Business School in France. The format for the exchange included questionnaire exchanges and Zoom meetings.

The exchange between French and Japanese students of the same generation served as a first step towards cross-cultural understanding for the Japanese students as well as a platform for educators to explore the possibilities of active and continuous learning.

¹ 本稿は第 9 回 JACTFL シンポジウム(2021 年 3 月 14 日オンライン開催)での発表を元にした報告である。シンポジウムでは、交流相手校教員の根来良江氏、後藤由美氏とともに共同発表を行ったが、本稿は日本側の取り組みに焦点を当て、西部が執筆した。

² 所属:慶應義塾大学 Keio University

Keywords:

online international exchange, cross-cultural understanding, French education

1. はじめに

2020 年春、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、日本では緊急事態宣言が発令され、多くの大学のキャンパスが閉鎖された。筆者が勤務する大学でもオンライン授業が導入され、試行錯誤を繰り返す中で瞬く間に春学期が終了した。

オンライン授業には利点もあるが、特にオンデマンド方式の場合、与えられた課題をこなすだけの受動的な学習に陥る可能性も否めない。また平時であれば、長期休暇中の海外旅行や、近い将来の留学計画が外国語学習のモチベーション向上につながることが多いが、2020 年はこのような目標を立てづらい状況であった。一方、コロナ禍によりインターネット環境は劇的に変化し、自宅から国内外のオンラインイベントに参加したり、自ら集会を主催することも容易にできるようになった。

そこで、日本とフランスの学生をインターネットでつなぎ、質問し合ったり自国の現状を報告し合ったりすることで、お互いの国を少しでも身近に感じる契機を作りたいと考え、秋学期の授業のプラスアルファのような形で交流活動を試みた。この活動の経緯と概要、学生たちの感想などを報告し、今後の学習のあり方を考えていきたい。

2. 交流のきっかけ

2.1 2020 年度春学期の授業

筆者は非常勤講師として勤務する大学の 3 学部 4 クラスでフランス語を教えている。いずれも 1 年生で、3 クラスは初修者、1 クラスは既修者を対象としている。

2020 年度春学期は、大学の方針により原則としてすべての授業をオンデマンド方式で行う形でスタートした。春学期半ばから、同期型授業への切り替えも可能になったが、筆者は自らの力不足もあり、非同期型授業を継続した。

授業動画を学生が視聴し課題を提出する、というオンデマンド授業に学生は真面目に取り組み、春学期期末アンケートでは概ね好意的な評価を得られたが、自由記述欄には「ずっと家でオンライン授業という生活にすっかり疲弊してしまっています」という類の切実な感想も見受けられた。秋からの授業を考える中で、学生にとっても教員にとってもストレスの多いオンライン授業を春学期と同じ形で秋学期も続けるのは難しいのではないかと自問するようになっていった。

秋学期は、対面、zoom、オンデマンドを組み合わせた授業を行うことにしたが、授業形態の変化だけでなく内容的にも、フランス語の授業が現実の社会とつながるような、何か面白いことを計画したいという気持ちが芽生えてきた。コロナ禍によってできないことだらけとなった新 1 年生に、今年だからこそできたと思えるような経験をしてもらいたい、と考えるようになったのである。同時に、これまで ICT に関する知識が皆無に等しかった筆者には、春学期に多少なりとも習得したスキルを用いた活動を自ら企画することで、授業の新たな可能性を見出せるのではないかという期待感もあった。

2.2 JACTFL シンポジウムへの参加

「今年だからこそできる体験」として日仏オンライン交流を思いついた契機は、2020 年 7 月 5 日に開催された「第 1 回 JACTFL オンラインシンポジウムーコロナに負けない多言語教育³」である。とりわけ以下の 2 つの発表に刺激を受けた。

一つは、茂木俊浩氏による「スペイン姉妹校への激励の手紙の送付ー小学校レベルの ICT 教育」で、オンライン授業が始まったごく早い時期に、小学生がスペインの姉妹校の生徒と互いに励まし合うような交流を行っていたことを知り、心を打たれた。もう一つは、後藤由美氏による「フランスからの報告」で、オンラインシンポジウムであれば、海外にいてもリアルタイムで参加、発表できるということを初めて実感した。これを授業に応用すれば、日仏の教室をつなぐことも可能だと認識できたことが、その後の計画につながった。後藤氏とは旧知の間柄であったため、本シンポジウム後に連絡をとり、交流企画を進めることになった。

2.3 過去の失敗経験

今回の交流は、フランス国立東洋言語文化学院(以下 INALCO と略)および ESCE 国際貿易ビジネススクールの講師である後藤由美氏と、ラ・トゥール中学高等学校教諭、パリ政治学院(以下シアンスポと略)講師の根来良江氏に依頼して実現したものであるが、実は根来氏とは 2017 年にも慶應、シアンスポ間の学生交流を試みたことがある。シアンスポの学生からの提案を受け、メール交換をしたい学生を募ったところ、日仏共に 10 数名の希望者が出た。自己紹介を提出させ、それをもとに 1 対 1 のペアを教員が組み、当時多くの学生が利用していたフェイスブックで連絡がとれるようにお膳立てをしたのだが、この企画は全くといっていいほど上手くいかなかった

³ https://www.jactfl.or.jp/?page_id=2899 [accessed 28 October 2021]

た。何となく交流してみたい、という気持ちから手を挙げた学生は、言葉が上手く通じなかったときに、それをどうにかして解決しようとするほどの強い意志をもっていただけではなく、学生のみで交流を軌道に乗せるのは難しいと痛感した。もう一度機会があれば、今度こそ学生たちをつなぐ活動を作り出したい、と欲していたことも今回の原動力となった。

3. 交流活動の概要

3.1 準備

日仏学生交流を計画できたのは、フランスで日本語教員をしている友人が 2 人いたという幸運によるところが大きい。今回は、自分が担当するすべてのクラスの学生に体験してもらいたかったため、4 クラスの相手を探す必要があった。発案者の筆者はともかく、4 クラスすべてを一人にお願いするのは申し訳なかったため、後藤、根来両氏に夏休み中に連絡し、秋学期に共に何らかの交流活動を行うことを快諾いただいた。

筆者が所属する学部の専任教員にも相談した。授業カリキュラムに支障がでない程度の活動を行いたいと伝えたところ、どの学部でも賛同していただけた。

学生には、秋学期の最初の授業で交流計画があることを話し、興味があるかどうかを尋ねた。それに対し、いきなりフランスの学生とオンラインで会話をすることには不安があるが、アンケート交換のような文字を介した交流であれば参加してみたい、という反応が多く寄せられた。

その後、10 月下旬から 3 回ほど、教員 3 名で Zoom ミーティングを行い、目標を共有し手順を決めていった。日仏双方とも、既に授業カリキュラムが決まっており自由に使える時間が限られていたため、本活動では語学面よりも文化的な交流を優先することにした。とはいえ、教科書で学ぶ文法事項や表現が実際のフランス(日本)で使われていることを実感して欲しいという思いもあったので、説明文を日仏 2 カ国語で併記するなど、学習言語に触れる機会を確保することも決めた。

交流方法は、時差の問題がなく誰でも簡単に参加できる企画としてまずオンラインアンケートを実施し、その後本格的な交流を希望する学生のために Zoom 交流会を開くという二段構えにした。先の失敗を踏まえ、交流は教員主導で進め、語学の知識がネックにならないような工夫を考えようということでも意見が一致した。

3.2 交流校組み合わせと交流日程

交流校は、なるべく語学レベルや専門が合うように考え、以下の通りとなった。

表 1 交流校の組みあわせ

フランス	日本(慶應義塾大学)
ラ・トゥール中学高等学校 高校 2 年生 8 名、高校 3 年生 7 名 (第 3 外国語) 日本語学習歴: 2~3 年	文学部 1 年生既習クラス 5 名 フランス語学習歴: 第 1 外国語として 3 年以上学習
シアンスポ 学年混合、初修クラス 14 名(第 3 外国語)	法学部 1 年生初修クラス 34 名(第 2 外国語)
INALCO 日本学部 1 年生 28 名	文学部 1 年生初修クラス 20 名(第 2 外国語)
ESCE 国際貿易ビジネススクール 1,2 年生 10 名(第 3 外国語) 初修者と学習歴 1 年の学生が在籍	経済学部 1 年生初修クラス 21 名(第 2 外国語)

3.3 オンラインアンケート交換

3.3.1 実施要領

Google フォームを使用したオンラインアンケートは、11 月第 4 週に各クラスで実施した。アンケート作成にあたり、質問文は、前述したように教育的配慮から日仏 2 カ国語で併記し、回答は学生の負担にならないように自国語を使うことにした。また、日本の学生には回答文の漢字にふりがなをふってもらった。これは、フランスの日本語学習者は、日本人がどのように漢字と平仮名を交ぜるかに興味をもっているので、適度に漢字も使って欲しい、という要望があったからである。

質問は、アンケートに回答している学生が実在することを実感するため、また一人一人に責任をもって記入してもらうために、「お名前を教えてください。」から始まり、各クラス 15 個程度考えた。答えは学習言語で読むことになるので、グラフが作成できる選択式の問題と、記述式のものを交えた。筆者のクラスでは、対面授業が少なく時間的余裕もなかったため、日本語で質問を考えてもらい、仏訳に関しては一部既習クラスで行ったほかは筆者が仏訳した。

3.3.2 質問項目

以下は、アンケートの質問例である。紙幅の関係で、日本語のみを掲載する。(日本の学生からフランスの学生への質問)

- ・日本に来たことがありますか？

- ・日本に2週間滞在するとしたら、訪れたい街を5つ選んでください。
- ・知っている日本人をあげてください。
- ・日本人にどのようなイメージをもっていますか？
- ・フランスのおすすめ観光地を3つ教えて下さい。
- ・フランスで今、どのようなファッションが流行していますか？
- ・日本では数年前に『フランス人は10着しか服を持たない』という本がベストセラーになりましたが、フランス人は本当に持っている服が少ないですか？
- ・東京オリンピックは来年開催するべきだと思いますか？何故ですか？

(フランスの学生から日本の学生への質問)

- ・フランスに来たことがありますか？
- ・フランス語で一番難しいのは何ですか？
- ・東京で好きな場所はどこですか？
- ・日本の高校までの学校の規則は厳しかったですか？具体例を1つあげてください。
- ・日本でしてはいけないこと(よく思われないこと)は何ですか？
- ・週に何回すしを食べますか？
- ・天皇に会ったことがありますか？
- ・コロナウィルスの流行で、日常生活にどんな変化がありましたか？

3.3.3 学生の感想

アンケートは課題の一つとし、ほぼ全員の回答が集まった。フランスからの回答は、質問ごとに原文のままパワーポイントにまとめ、一部和訳をつけながら、授業で紹介した。それに対し、以下のような感想が集まった。

- ・結構日本に興味がある人がいてくれるんだなと嬉しかったです。
- ・日本の映画や漫画という文化が想像以上にフランスでも浸透していて驚きました。知っている日本人の質問の中で、宮崎駿さんの知名度が高かったり、尾田栄一郎さんの名前があったりしたからです。また、天皇のことを知っていたことも驚きました。
- ・流行しているファッションが日本と同じことがびっくりしました。韓国の影響も日本は地理的に近いからであると思っておりましたが、フランスでも流行していると知り、とても驚きました。
- ・日本で行ってみたい場所について広島と答える方が多かったのが印象的でした。

日本人以外の方が方がむしろ日本の歴史に関心を持っているのではないかと感じました。

- ・フランス人が服を 10 着以上持っているということに驚きました。また、この噂話がフランス人の中で浸透していなかったということに驚きました。
- ・同年代の方々からのおすすめ等の回答はとてもリアルで、よりフランスに興味を湧きました。アンケート回答を見ていて思った事は、フランスの若者の間で流行っているスラッグ等も聞いてみればよかったと思いました。しかし、haha⁴などは、(笑)や草といった部類に入るのかなとも思いました。

3.3.4 オンラインアンケートのまとめ

アンケートを通じて、同年代の若者が書くフランス語を読み、彼らの生の声に触れたことには意味があったと思う。教員にとってもフランスからの回答は情報の宝庫であり、これをリユースしてクイズを作ったりもした。

日本の学生たちが作った質問は、基本的にそのまま仏訳してアンケートを作成したが、一つだけ、「日本で訪れたい街」に関する質問の選択肢に、学生たちが考えた 16 の都市に「広島と長崎」を付け加えて欲しい、ということは筆者から提案した。フランスからの観光客がこの 2 都市をよく訪れていることを知っていたからである。実際、広島と長崎を選んだ学生はどの大学でも一定数おり、それに注目した感想もいくつかあがった。

海外旅行や留学をきっかけに自国に向ける眼差しが変わることがあるが、それと同じようなことがアンケートを通じても起こったと思う。たとえば、日本人が普段あまり意識しない「天皇」は、海外の人からみればかなり特異な存在であり、それゆえ「天皇に会ったことがありますか？」という質問が生まれたり、「知っている日本人」の上位に天皇が入ったりしたのだが、それは予想外だったようだ。マンガ家やアニメ関係者の知名度が高かったことも、日本の学生にとっては驚くと同時に嬉しい発見であった。

話題が日本とフランスにとどまらなかったことも興味深かった。「フランスで流行しているファッションは？」という質問に対し、大多数が書いた「マスク」という答えに加え、「韓国のファッションが流行している」という回答がいくつかあり、フランスと韓国という関係性に興味をもった学生も複数名いた。フランス語の学習がフランスやフランス語圏の言語と文化の理解に役立つ、というだけでなく、外国語を学ぶことが世界との対

⁴ 回答文の中でフランスの多くの学生が用いていた表現。

話につながる、という視点を授業の中でも伝えていきたい、と感じた。

また、交流そのものとは関係ないが、課題提出が滞っていた学生が真っ先にアンケートに回答した、という事例もあった。語学の課題をためてしまうと、遅れを取り戻すにはかなりの気力が必要となるが、語学力を必要としない課題が混ざり、ほっと一息つけたのかもしれない。筆者も声かけのタイミングがつかめ、最終的にその学生は学習課題も完了できた。フランス語の学習に関わる様々な「入り口」を用意しておくことは有用で、気楽な異文化交流はその役割も果たせるのではないだろうか。

反省点としては、時間に余裕がなかったため一度しかアンケートのやりとりができなかったことがあげられる。また、語学学習よりも文化交流に重きを置いた活動とはいえ、フランスの学生が書いた回答文という貴重な教材を活かしきれなかった悔いは残っている。使われているフランス語そのものに着目した感想も僅かであった。回答全体を理解することは難しいとしても、ところどころに知っている表現が使われていたはずであり、普段の授業内容と現実のフランス語を明快な形でつなげることができれば学生の学習意欲をもっと高めることができた可能性がある。

3.4 オンライン交流会

3.4.1 実施要領

オンライン交流会は、学生に発話の機会を提供し、フランス語を用いたコミュニケーションを実践することで、言葉が通じる達成感を多少なりとも感じてもらいたいという気持ちから企画したが、時差の関係により授業時間外にしか設定できなかったため希望者を募って実施した。授業で使い慣れている Zoom を用い、ブレイクアウトルームも活用した。12月上旬に、日程調整ができた交流校ごとに3日程の交流会を行ったところ、「もう一度参加したい」という要望が多く集まり、1月下旬から3月にかけて4日程で再度交流会を開いた。会合は日本の18時(フランスの10時)に開始し、1時間程度で終わるようにした。毎回全体で15名程度の学生が参加した。

プログラムは2部構成である。前半は各参加者が2分程度のミニスピーチを行い、初めは学習言語で、次に同じ内容を自国語で話した。テーマは第1回のときは自己紹介、第2回は自国や自国の文化に関するフリートークとし、多くの学生が写真などを共有しながらスピーチした。前日にプログラムを送付してスピーチの順番を伝え、ロスタイムが出ないようにした。アンケート同様、プログラムや事後アンケートはすべて日仏2カ国語併記とし、教科書に出てこない表現にも出会える機会を作れたと思う。

後半は、1対1か1対2で話せるようなグループ分けをし、ブレイクアウトルームに

移動してもらった。教員がチャットで合図を送り、まずは日本語だけで 5 分間、次にフランス語だけで 5 分間話す時間を作った。フランス語(日本語)を話さざるを得ない状況にするため、敢えてグループは少人数にし、おしゃべりを終えて全員で集合したあと、メンバーを変えて再度ブレイクアウトを行った。

3.4.2 ミニスピーチのテーマ

日本の学生はスピーチで、行事(正月、桃の節句)、食(和食、たこ焼き)、都市(広島、沖縄、横浜など)、美術(若沖と宗達)、80年代のJポップなどの紹介をした。

一方、フランスの学生は、食(ラクレット、ポトフ、ガレット)、デパート(ギャラリー・ラファイエット)、フランスの音楽や歌手(ポム)、オルセー美術館などを取り上げた。

3.4.3 参加学生の感想

事後アンケートから、日本の学生の感想を一部紹介する。

- ・自分の学習した単語や文法が実際に現地の学生に通じるのか、最初はとても不安でしたが、こちらの質問を理解してくれ、会話が成立した時は非常に感動しました。
- ・相手の学生さんの日本語がとても上手で驚きました。私がフランス語を聞き取れなかった時も日本語で繰り返してくれて、とても親切で感動した反面、私ももっとフランス語を頑張らなきゃと思いました。フランスの方とお話する機会は初めてでしたが、とても楽しかったです。
- ・ブレイクアウトルームで1対1で話した方には、間違いながらもとにかく話し続ける姿勢に勇気づけられた。自分も同じように続けようと考えた。
- ・コロナ禍でオンライン授業が続き、大学の中でさえ学生同士なかなか交流が難しい中、このようなイベントに参加出来たのはとても嬉しいです、なにより楽しかったです！
- ・初めての交流会はフランス語になれていなかったもので、フランス語を聞き取ったり、話したりすることができず、悔しい思いをしました。2回目ではもっと話したいと思い、教材を買って少し勉強したおかげでフランス語を聞き取って話すことができとてもフランス語が好きになりました。また、インスタを交換してやり取りをする相手のできたので、とてもありがたいなと思いました。

3.4.4 オンライン交流会のまとめ

オンライン交流会では、当初日本側の希望者が少なく、人数調整に苦労した。中止になった回や、他のクラスの先生に呼びかけていただいて何とか開催できた回もあった。興味を覚えつつも参加する勇気をもてなかった学生もいたようだが、その原因として、授業における発話機会が非常に少なかったことが考えられる。フランス語で文章を組み立てることができても、その発音に自信がないとリアルタイムの交流に参加してみようという気もなかなか起こらないだろう。授業の課題にスピーチなどの活動を取り入れていれば、学生の参加を後押しできたかもしれない、と反省している。

一方、成績に加点されるわけでもない交流会に、わざわざプライベートの時間を割いて参加した学生には、学習言語を使ってとにかくコミュニケーションを試みようとする積極性が見られた。参加したすべての学生が何らかの手ごたえを感じ、次の目標を見出していたように思う。複数回参加した学生も多く、回を重ねるごとにミニスピーチのレベルも上がり、互いにより影響を与え合っていたように感じられた。またブレイクアウトルームを使えたのは大きなメリットで、すぐ隣に相手がいるような感覚で異国の学生と話せたことは、緊張したり沈黙してしまったりということがあったとしても、「言葉を使う」よい体験になっただろう。互いを励まし、会話を続けようと努力した 10 分間は、教師不在の学び合いの場となり、「もっと話したい」「もっと理解したい」という気持ちを強めたのではないだろうか。

学生同士の連絡先交換については、何もせずに終了した回もあったが、学生が自発的に自分の連絡先をチャットに書き、後日インスタグラムのチャットグループができたこともあったし、個人的にメール交換をしているペアもいるようである。このように一度顔を合わせて話した関係ならば、交流を継続していこうという気持ちも生まれるだろうし、いずれ旅行や留学を通じて学生同士の対面が実現すれば、企画者としてこれほど嬉しいことはない。

交流会後の交流、ということも念頭に置いて、ブレイクアウトルームのグループ分けについては、教員同士で事前に打ち合わせをし、趣味が似ている学生や何かしら共通点がある学生を同じグループに配置するように工夫した。たとえば、日仏ともに中国にルーツをもつ学生が参加していた回があり、その 2 人を同じグループにしたところ、お互い外国にルーツがある故の似たような苦労があったようで意気投合し、フランス語に加え、中国語と英語という共通語もあり、交流会後もずっと連絡を取り合っている、という嬉しい報告があった。

先に、この活動の原点には「コロナ禍だからこそできたと思えるような、何か面白い

ことを企画したい」という思いがあったことを述べたが、参加学生たちの楽しそうな表情から、この目的はある程度達成できたように感じた。

4. 今後に向けて

閉塞感を打破したいという気持ちが先行して見切り発車で始めたこの交流活動は、当初は筆者の中では「コロナに明け暮れた一年の思い出作り」のような位置付けであった。しかし、学生が気楽に参加し、自国についても世界についても様々な気づきを得ることができた異文化交流活動は、教員にとっても想像以上に実りが多く、次第に「共有と継続」を考えるようになった。

交流に携わった教員同士の情報共有が有益だったのは言うまでもないが、今後は自ら発信することで、共有の輪を広げていきたい。また学生に対しては、今回の活動資料を次年度の学生たちと共有し、より質の高い交流を継続したいと考えている⁵。

人々の生活リズムが変わったときに Zoom 交流会を続けられるかという心配もあったが、2020 年度に比べて皆の外出機会が増えた 2021 年度にも Zoom 交流会を行うことができ、学生側に一定のニーズがあることも確認できた。

今回の取り組みは自らの授業の進め方を見直す好機にもなった。カリキュラム上、フランス語の初級文法を教えることになっていたとしても、学習した知識が練習問題を解くことにしか役立たなければ学生も勉強の目的を見出せなくなるだろう。その知識を用いて自分の考えを発信できるようになり、外からの情報もキャッチできるようになったときに、学習は教室外の活動に発展していくのだと思う。「交流のための授業」でなくても、「交流をしたくなるような授業」を目指し、学生たちの「学びたい」「通じ合いたい」という気持ちを引き出せるように努めながら交流活動も続けていきたいと考えている。

謝辞

本報告執筆にあたり、共に交流活動を企画、実践してくださいました根来良江氏、後藤由美氏から貴重なご助言を賜りました。心から感謝申し上げます。

⁵ 2021 年度も、本稿執筆中の 10 月から 12 月にかけて、同じ教員メンバーで同様の交流活動を実施し、改良できた点もある。たとえば、今年度のアンケートは、2020 年度アンケートの質問リストを配布し、それをアレンジする形で学生自身にフランス語の質問を考えさせることができた。アンケートにしろスピーチにしろ、先輩が作ったモデルがあることは、交流活動参加へのハードルを下げることに役立つだろう。